說」は、明治四十二年神社協會雜誌に發表せられたものであつて度會神道の先驅者行忠と、その完成者家行に就いて論ぜしもので同雜誌に明治四十五年に掲載せられ、本書に收錄する「出口延佳神主の事績と學說」と共に、山田に於て調査せられた翁の勞作であつて、未だ學界に於ては關心を有たれてゐなかつた時代に、早くも度會神道の價値を認識してその研究に着手せられた事は最も敬服に堪えない。

又明治四十四年一月より一年に亘つて國學院雜誌に連載せられた「唯一神道論」は、兼倶の諸說、その神道說、唯一神道を創說せる所以、その弘布の方法及び結果等を詳細に論じたもので、率先して未開拓の分野に組織的卓見を披表せられたものであり、「吉田家の吉田神社に於ける奉仕並に其の信仰の一斑」(昭和十三年、神社協會雜誌)なる翁の絕筆の論文と共に、唯一神道研究の上に於けるその功績は永久に不滅であらう。

又、「竹內式部君神都蟄居中の事蹟及び學說一端」は、式部の傳記中從來不明であつた寶曆九年より明和四年に至る九年間、卽ち式部の神都蟄居中の事蹟を究明せしものであり、翁の伊勢在住中の勞作である。

「祝年祭祝詞及大神宮辭別の詞」は、大正八年二月十六日當時の祭主久邇宮多嘉王殿下に御進講せられた案文である。

以上六篇、神道史研究の上に於て或は未墾の野を開拓し、或は組織的體系を樹立される等、その學界に盡された所は僅小ではなかつた。

本書が翁と親交ありし宮地直一氏や高弟押木耿介氏等の盡力によつて、廣く天下に頒たれ、翁の學德を偲ぶ資となつた事は誠に意義深い事であらう。(明治書院、定價參圓)(淵原宣雄)

考史遊記

桑原隲藏著

普通に旅行記とか遊記などといへば、半日か一日もあれば手輕に讀み了へうるやうに思ひ勝ちであるため、舊四六倍型、三〇〇頁にあまる本文に、二七一葉を計へる圖版をそへた大册を手にしては、まづ誰でもがその尨大さに一驚する。本書は、博士が嘗て清國留學中に歷遊された三回にわたる大旅行、「長安の旅」「山東河南遊記」「東蒙參古紀行」の三篇より成り、卷頭を第一回の長安・洛陽への旅に同行された宇野哲人、第三回目の東蒙古旅行を伴にされた天野仁一兩博士の序文が飾つてゐる。これらの三大紀行はその昔雜豫二州旅行日記、山東河南地方遊歷報告書、或は東蒙古旅行報告書として、いづれも雜誌歷史地理の誌上を賑はしたものであるが、しかし何分にも三十餘年以前のことではあるし、一般の人人には容易に見るをえないものであつたため、その繙まつた出版はしきりに望まれるところであつた。幸にも今日それらの希望がかなへられたことについては、本書出刊に當り斡旋役として博士の舊記の整理、圖版の挿入配置などに高端の手配をされた桑鹿三氏のなみなみならぬ苦心に對し感謝しなければならない。

さて矢野博士の序文によれば、長女の旅と山東・河南遊記とはかねがね博士留學の當初より豫定され、それに關する調査資料も充全に準備されてゐたらしく、道途にある一碑一墳たりとも看過されることなく、一一嚴正細密に史を考へ書に按じて、その確當を期してゐられる。しかも徒らに考證のみに墮せず、史上顯著な遺物や舊址に關しては、その沿革來由を要領よく說き明かし、進んで自らの創見を提起されてゐる。たとへば長安に迴詳觀をみては唐代道教の大概をいひ(三八頁)白馬寺に遊んでは佛教傳來の時代を稽へ(一〇一頁)昭陵(唐太宗陵)に附しては支那歷代帝王陵の沿革に及び(七二頁)或は齊河に臨んで黃河流域の變遷を古今に亘つて論じ(一二二頁)また開封府に到つて女眞小字碑を探訪確認し(一八八七頁)ユダヤ教・寺に關する新知見を發表せられる(一九九頁)など隨處に橫溢する博士の該博な史識と透徹した史眼とには、さきに大册を手にして一驚した讀者は再度驚嘆することと思ふ。

これらの二大旅行のうち、前者は明治四十年九月から十月に、後者はその翌四十一年春夏の交に企てられ、そのいづれも全行程の大半を車馬で踏破されてゐる。隴海線・津浦線の貫通をみ、國道の發達した今日に比べると當時の交通不便さは想像にあまるものがあるが、それだけにまた清朝末期における中原地方の政治・經濟・交通・教育・民生などの狀態が日記の到るところに活寫されてゐる。

第三回の東蒙古旅行は山東河南の旅から歸るや月餘にして敢行されたものであるが、その行路は北京から古北口・熱河・平泉・赤峯をへ、北上してシラ・ムレンを渡り林東に遂の上京址を訪ねさらに西に轉じて林西—經棚—應昌城址より一路南下してドロン・ノール附近に元の上都城址を探り、張家口に出で、宣化を經由して歸京されてゐる。この行は南興安嶺の東西麓に互る蒙・支混住の、いはゆる蒙漢地帶であるだけに、蒙古の政治型態或は蒙古人の生活樣式或はまた清末における漢人の殖民狀態などが、その鋭敏な觀察眼によつて如實に描き出されてをり、この方面の研究者によく參考されるユックやキャンベルやポズドネフら外人の旅行記に比しても決して劣らないものである。蓋し、本篇は今日滿洲國や蒙古自治政府にあつて重要視される蒙支兩民族に對する政策立案の上にも大いなる貢獻をなすであらうことを信じて疑はない。

およそ支那での車馬旅行ほど——自分も多少の經驗はあるが——一見呑氣そうにみえて苦難に滿ちたものはない。惡路の難澁、客舍の不潔、飲用水の汚惡、天候の急變などなど、特にそれが塞外地方にあつては一層甚しい。もし萬が一病氣にでもなれば、まづおしまいと思はねばならない。だから頑健なものでも長途の旅行には一大決意を要するのに、生來蒲柳の質であられた博士をしてかかる大旅行を、しかも數回に亙つて重ねしめたものは、一に博士の有せられた學問に對する不退轉な捨身的精神であることに思ひを致すとき、われらの一驚再嘆は遂に深い景仰の念に變つてくるのを覺える。(弘文堂書房、定價拾貳圓)(田村寅造)